

幸いを神から受けるのだから

「ヨブ記」からの説教 No.2
【聖書箇所】 2章1節～3章26節



ベレーシート

●ヨブ記の「プロローグ」(1～2章)と「エピローグ」(42章7～17節)は、写真のフレームのようなものです。その枠組みだけを読むならば、日本昔話のように、その内容はだれもが理解しやすい内容のストーリーです。しかしこの「ヨブ記」の著者の一番言いたいことはその間の部分(3章～42章6節)にあります。つまり、苦難についての意味です。その部分を読み、瞑想することは、かなりの忍耐が求められます。しかし、「プロローグ」と「エピローグ」のフレームがあることで、ある意味、安心して読んで行くことができるように思います。

●1～2章は、「いたずらに」「何の理由もないのに」(「ヒンナーム」^{הִנְנָאִם})ヨブを襲った苦難の出来事の裏舞台が描かれています。その裏舞台とは、ヨブを巡る主とサタンとの駆け引きです。2章1～6節は、1章6～12節と似た設定となっています。

●まずは、ヨブ記2章1～6節まで読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】

- 2:1 ある日のこと、神の子らが【主】の前に来て立ったとき、サタンもいっしょに来て、【主】の前に立った。
- 2:2 【主】はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは【主】に答えて言った。「地を歩き回り、そこを歩き回って来ました。」
- 2:3 【主】はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない。彼はなお、自分の誠実を堅く保っている。おまえは、わたしをそそのかして、何の理由もないのに彼を滅ぼそうとしたが。」
- 2:4 サタンは【主】に答えて言った。「皮の代わりに皮をもってします。人は自分のいのちの代わりに、すべての持ち物を与えるものです。」
- 2:5 しかし、今あなたの手を伸べ、彼の骨と肉とを打ってください。彼はきっと、あなたをのろくに違いありません。」
- 2:6 【主】はサタンに仰せられた。「では、彼をおまえの手に任せる。ただ彼のいのちには触れるな。」
- 2:7 サタンは【主】の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物で彼を打った。

1. 「自分の誠実を堅く保つ」と神に評価されたヨブ

●1章と似たような設定ではじまる2章。自分の子どもたちとすべての財産を失うというヨブの最初の試練の中で、神は「彼はなお、自分の誠実を堅く保っている」と評価しています。2章3節にあるフレーズの他の訳も見ておきましょう。

【新改訳改訂第3版】2章3節にあるフレーズ

彼はなお、自分の誠実を堅く保っている。

【新共同訳】

彼はどこまでも無垢だ。

【口語訳】

彼はなお堅く保って、おのれを全うした。

【中澤訳】

彼の全き心はゆるがないぞ。

●訳文のニュアンスは幾分か異なりますが、試練の中にあっても、ヨブは神に対する自分の誠実(潔白さ)を堅く保持したというのが原意です。1章8節と2章9節で使われている「潔白で」という訳語は形容詞の「ターム」(תָּמֵךְ)ですが、2章3節と9節で「誠実」と訳された原語は「ターム」の名詞形「トゥッマー」(תְּמִימָה)です。「潔白」「無垢」とも訳されます。旧約では5回しか使われていない語彙ですが、5回のうち4回がヨブ記で使われています(2:3, 9/27:5, 31:6)。

●ちなみに、形容詞の「ターム」(תָּמֵךְ)も14回のうち、7回がヨブ記で使われています(1:1, 8/2:3/8:20/9:20, 21, 22)。意味としては「潔白」の他に、「トゥッマー」(תְּמִימָה)は英語で「インテグリティ」(Integrity)と訳されています。まさに完璧な人格者とも言うべき人です。このような人物は地上にはいないというのが、神が認めるヨブの評価でした。

2. 神の評価に対するサタンの嫌疑

●主のヨブに対する評価に対してサタンは嫌疑をかけます。そのことばが、「皮の代わりには皮をもってします」という表現です。これは新改訳の訳ですが、この表現はいったいどういう意味なのでしょう。この箇所の解釈は難解とされています。というのは、「皮」(「オール」עוֹר)と「皮」の言葉の間にある前置詞である「バアド」(בְּאֵד)をどう訳すかで意味合いが変わって来るからです。「バアド」(בְּאֵד)は「～を通して」「～のうしろ」「～のために」「～のまわりに」という意味ですが、「オール バアド・オール」(עוֹר בְּאֵד עוֹר)は以下のように訳され、解釈されています。

(1) 関根正雄氏は「**皮の奥に皮があり**」と訳しています。人の心は幾重にも皮で覆われていて、そう簡単には分からないもの。つまり、「裏には裏がある」という意味だと解釈しています。1章21節にあるように「裸でわたしは母の胎を出た、裸でかしこに帰ろう。主の御名はほむべきかな」などと敬虔ぶったことを言っているが、裸の奥に彼の本心があり、彼は自分の子どもたちすら自分の生命のためにはそれほど惜しいと思ってないのだ。神の攻撃が今度はもっと直接自分に向けられ、病気や死がやって来てはたまらないので、敬虔ぶったことを言って、

神がこれ以上向かってこられるのをうまく回避しようとしているだけだ。それほど人間は髓の髓までエゴイストであり、信仰深いなどというのは偽善なのだ、と解釈しています

(2) 中澤治樹氏の「ヨブ記」(新訳と略註)によれば、その同じ箇所を「背に腹はかえられぬ」と訳しています。「背に腹はかえられぬ」とは、大切なことのために多少の損害はやむを得ないという意味です。ここでのサタンの言い分は、「人は自分のいのちが危険にさらされれば、持っているものを何でも捨てるエゴイストに過ぎない」と解釈しています。

(3) 北森嘉蔵氏は口語訳の「皮には皮をもって」という部分について、財産が失われ、子どもたちが失われたことは、まだ皮の程度の苦難で、それに対するヨブの反応も皮程度のものであって、肉や骨にまでは入り込んでいないと解釈しています。皮程度の苦難であるゆえに、ヨブは自分の誠実を保っていられただけのことであり、それが彼の肉や骨に及ぶならば、話は別で、必ず、神を呪うに違いないと洞察しているのです。ちなみに、新共同訳も「皮には皮を」と訳しています。

●いずれの解釈にしても、サタンの洞察には実に鋭いものがあります。神とサタンとの駆け引きは、より深刻さを増し、ヨブは悪性の腫物で全身が侵されます。「腫物」というヘブル語は「シュヒーン」(שִׁחִין)ですが、実は、ユダの王ヒゼキヤもこの病にかかっています。しかし預言者イザヤの「干しいちじくを患部の腫物に当てる」という療法によって彼は癒やされています。しかしヨブの場合、腫物によるかゆみが止まることはありませんでした。しかも悪性の腫物によって、ヨブのからだはヨブだと見分けがつかないほどに変わり果ててしまったのです。



3. 神の絶対主権を認めるヨブの信仰

●悪性の腫物による苦難の深刻さは、ヨブの妻をして「神をのろって死になさい」とまで言わせたほどだったのです。ところで、「のろう」と訳されたことばは、原語で「祝福する」という「バーラフ」(בָּרַךְ)が使われています。ヨブ記で「祝福する」の意味で使っているのは、1:10, 21/31:20/42:12 ですが、「のろう」という意味で使われているのは、1:5, 11/2:5, 9 のみです。ヨブの妻が言ったことば―「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神を祝福して死になさい。」と訳すなら、まことに嫌味な言い方です。悪い言葉を使わずに、悪い意味をこめて言う表現を婉曲語法といいますが、それがヨブ記ではなんと4回も使われています。

●いずれにしても、このことばで夫婦の袂は分かたれます。かつては素晴らしい家庭を築いていたわけですから、ヨブの妻もそれ相応の立派な妻であったと考えられます。その妻が直面する現実に耐え切れずに、ヨブを見捨ててどこかへ去ったと想像できます。

●ところが、サタンの思惑とは逆にヨブの信仰は極まります。「幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けなければならないではないか」と言うヨブの信仰はまことに見上げたものです。御利益的な信仰が木っ端みに吹っ飛んでしまうような純粋な信仰です。無垢な信仰です。信仰の頂点です。ここから一気にエピローグ(42

章)に飛べば、「めでたし、めでたし」と終わるのですが、そう簡単には問屋がおろさないようです。

すばらしいヨブの信仰告白ですが、北森嘉蔵氏はここで「すべてのこの事においてヨブはそのくちびるをもって罪を犯さなかった」(新改訳では、「罪を犯すようなことを口にしなかった」と訳していますが)という所の「くちびるをもって」という所に着目し、確かに「くちびるをもって」罪を犯さなかったが、「心の中では」ということが言外に含まれていると解釈し、この点で、聖書は非常に的確な表現をしているとしています。というのは、3章からヨブの内心の思いが口から出て来るからです。

4. ヨブを慰めるために申し合わせてやって来た三人の友

【新改訳改訂第3版】

2:11 そのうちに、ヨブの三人の友は、ヨブに降りかかったこのすべてのわざわいのことを聞き、それぞれ自分の所からたずねて来た。すなわち、テマン人エリファズ、シュア人ビルダデ、ナアマ人ツォファルである。彼らはヨブに悔やみを言って慰めようと互いに打ち合わせて来た。

2:12 彼らは遠くから目を上げて彼を見たが、それがヨブであることが見分けられないほどだった。彼らは声をあげて泣き、おのおの、自分の上着を引き裂き、ちりを天に向かって投げ、自分の頭の上にまき散らした。

2:13 こうして、彼らは彼とともに七日七夜、地にすわっていたが、だれも一言も彼に話しかけなかった。彼の痛みがあまりにもひどいを見たからである。

●ヨブの身に起こった災難を聞いて訪れた三人の友人は、ヨブの変わり果てた姿を見て悲しみ、七日七夜、一言もヨブに話しかけませんでした。話しかけることができなかったというのが真実だったと思います。

●ところが、3章において、あまりの辛さに、ヨブは自分が生まれた日をのろいます。そのことと三人の登場がリンクするのです。つまり、3章のヨブの独白が、三人の友人をして、苦難に対する友人たちの伝統的な考え方を明らかにする動因となっているのです。ヨブ記の著者が言わんとすることは、まさにその彼らの苦難に対する考え方とヨブの苦難とを対比させていることです。それが3章から31章までの本論ともいうべき内容なのです。

5. ヨブの「のろい」のことばと神に対する二つの問いかけ

(1) ヨブの「のろい」のことば(3~10節)

●ヨブ記の本論は3章から始まります。ヨブの友人たちはヨブのあまりに深い悲しみを目の当たりにして、衣を引き裂き、ちりをかぶって、全く沈黙して座り込んでしまっていました。この沈黙を最初に破ったのはヨブ自身でした。この3章は、神に向かってでもなく、また人に向かってでも、独り言のように、ヨブの口から「のろい」のことばが出てきました。聖書は「こののちヨブは口を開いて、自分の生まれた日をのろった。」と記しています(3:1)。

●1章、2章での「のろう」ということばは「祝福する」ということばの婉曲語法としての「のろう」でしたが、ここ3章では「カーラル」(קָלַל)の強意形ピエル態が用いられて「のろう」という意味になります。「カーラル」の意味は、本来の「軽んじられる」「速い」という意味ですが、それが「のろう」という意味とどうつながるのでしょうか。それはヨブの心にあった苦々しい思いが、何ら制御されることなく、軽率にも、口からつい愚痴となって出てしまったということかもしれません。

●エレミヤも、実はヨブと同様に自分が生まれた日をのろっています(エレミヤ 20:14~18)が、そこで使われている「のろう」という動詞は「アーラル」(אָרַר)が使われています。創世記 3章でへびのろわれ、土地がのろわれるという受動態で使われています。こちらが一般的な「のろう」という意味です。ですから、ヨブの口から出て来たことばは、苦しみゆえに、うかつにも口から出たため息まじりのことばだったと言えるかもしれません。もし仮にそうだとすると、心の中から出た真実なことばとして耳を傾ける必要があります。

(2) 神に対するヨブの二つの問いかけ(11~23節)

●1~2章とは異なり、3章では「主」(יהוה)という神の名前が全くありません。このあとに出て来るのは12章に1回(12:9)と38章、40章、42章です。それまではすべて「神」(「エローハ」אֱלֹהִים)です。

3章には、心の吐露として、ヨブの二つの問いかけがあります。「なぜ」(Why)ということばが多く見られます。KJVでは7回、新改訳も7回その訳語が見られますが、原文では二つの語彙の、合わせて4回だけです。いずれも、「なぜ」(Why)と訳されています。

① לָמָּה 「ランマー」・・原文は、3:11, 20, 20

② מַדּוּעַ 「マッドウーア」・・3:12(他に、18:3/21:4, 7/24:1/33:13)

●二つの問いとは、以下の問いです。人が追いつめられるならば、だれもが発してしまうようなことばです。

① なぜ、自分は生まれてすぐに死ななかったのか(11~19節)

② なぜ、神は自分を生かしておられるのか(20~23節)

自分を支えてくれる者がだれひとりとしていないということを信じてしまったときに、人は絶望し、自殺します。支え合っただけでしか生きられない存在が、その支えとなるものを喪失する時、それは「死」を意味します。しかしここで重要なのは、生きているよりも死んだ方がましだとして、自ら死を選び、自殺するという考えは聖書にはないということです。

●自殺には三つのことが重なると起こると言われています。

①もう自分の手に負えないことと思えるような状況ことを、その人が感じているという状況です。

②手に負えない状況が一時的な者ではなくて、ずっと続いていくとその人が感じてしまい、これからも好転する見込みがないと思ってしまうひとです。

③自分を消す以外に道がないと思っているその人に、歯止めがかからないということです。なんらかの歯止めがかかれば自殺は起こりません。自分が死んだら家族や子どもがどうなるだろうとか、あるいは、神から与えられ

ている生命を自ら奪ってはならないというような聖書の教えを知っている者は、なんらかの歯止めがかかります。自殺は、生きていく力がないと自ら考えてしまった人が陥った状態であると言えます。その人にとって生きていく力の源がなければ、そうになってしまうかも知れません。

●日本では、自殺する人の数が一年間に3万人以上もいます。これは警察や保健所による統計なので、実際はもっと多いだろうと言われています。多くの人は神を待ち望まず、死を選んでしまっているのです。なぜなら、そこには「私の救いは神から来る」という信仰、「いのちは神のもの」という考え方が全く欠如しているからです。

6. ヨブが最も恐れたものとは何か(24～26 節)

●3章25節には、「私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。」とはどういうことか。同義的並行法によるこの表現が意味することは、21節に、「死を待ち望んでも、死は来ない」とあるように、死を望んでも死ぬことができず、苦しみながら生きることを余儀なくされている状態のことです。しかも神が、それに対して全く沈黙しているということです。それゆえ、「私には安らぎもなく、休みもなく、いこいもなく、心はかき乱されている。」とヨブはうめいているのです。

●生も死も、自分の意志によって操作ができないという神の絶対主権という前提の中でヨブは苦しんでいるのです。なぜなら、彼のいのち(ネフェエシュ)は神のものだからです。それゆえ、1章、2章では、神はサタンにヨブの信仰をふるいにかけることを許しても、ヨブの「いのち」(「ネフェエシュ」**נַפְשִׁי**)にふれることを禁じています。「いのちはだれのものか」。その問いかけはヨブ記を読むことにおいて大きく左右してきます。

●人間には自分の意志でどうにもできない事柄があります。それを宗教的出来事と言うことができるかも知れません。自分の(存在の)事柄でありながら自分の意志で自由にできない事柄です。そのような事柄は三つあります。それは「誕生」と「死」、そして「出会い」(神との出会い、結婚相手との出会いなど)です。自分の人生にとって最も重大な出来事でありながら、自分の意志で思う通り、自由に、操作したりできない事柄です。特に、誕生と死はそうです。人は自分の誕生を自分で決められないと同様に、自分の寿命も自分で決められないのです。

●ところが、この世には自分のいのちを生かすのも殺すのも、自分次第(操作可能)と考える人もいます。それは、あたかも自分のいのちを自分の意志によって得たかのように考えているヨブの妻にある「愚かさ」です。聖書における人のいのちは、神によって与えられたもので、それは神のものであり、人の意志で操作してはならないという峻厳たる土台があります。「はじめに神が・・・」という絶対的な神の主権という概念の中にヨブは生きています。ヨブの苦悩はその概念の中で生じているものです。自分のいのちを操作可能と考える世界にヨブは生きていないのです。そのことを前提としてヨブ記のテーマを瞑想していく必要があります。この前提の背景には、別の言葉で表現するならば、人間中心的な概念(ヘレニズム)を土台として生きるか、神中心の概念(ヘブライズム)を土台として生きるかといった世界観の大きな隔たりが存在しています。

2014.5.18